

アメリカ南部覚え書き：1969-70年

藤 倉 皓 一 郎
藤 倉 寿 美 子

はじめに

私たちは1969年9月から1970年7月まで、ジョージア州アトランタに住んだ。ふりかえってみると、それは、いろんな意味で、古い南部の人種隔離の体制が崩れ去り、新しい南部が生れる一つの転換期に当たっていたといえる。そのまえに一度、私たちは1963年夏、南部をはじめて訪れた。二週間あまりのバス旅行であったが、それまでアメリカ中部と北部の大学の学生生活をとおしてしかアメリカを知らなかった私たちにとって、南部は違ったアメリカであるという印象が強かった。その時、1964年の「公民権」運動の一つの頂点に向ってたかまってゆく、変動前夜の南部をかい間みたことが、時間の経過とともに鮮明になった。私たちがはじめて得た在外研究の場所に南部を選んだのは、この時の印象がきわめて強かったからである。

1969年9月からの一年間、私たちが体験し、見聞し、読みとった南部の個人的な覚え書きを以下にまとめてみたいと思う。それがアメリカ史の文脈のどこかにつながり、小さな脚註にでもなればというのが、本稿を書く動機である。末尾には、おもにその時期に関連のある文献で手許にあるものを掲げることにする。

南部のホスピタリティ

ホスピタリティに「主人性」という訳語をつけたのはオーティス・ケーリ教授である。けだし名訳であろう。南部人の客の迎え方、主人性には定評がある。それは人間関係の機微に触れる心遣いが様式化され、慣習化しているのである。

1969年9月、ジョージア州のアトランタ空港に一家で着いたとき、エモリー・ロー・スクールの受入れ教授であったDさんが大きなステーション・ワゴンで迎えに来てくれていた。大学のアパートに着くと、日本から送った郵便小包が部屋の中にちゃんと積まれていた。冷蔵庫にはパン、牛乳、ジュース、卵など、すぐ使う食品が入っており、そのレシートとともに歓迎のメモが置いてあった。その日はD家に招かれ早目の夕食を御馳走になった。初対面のDさん夫妻は私達と同年輩で、お互いの子供達も同じ年齢好である。私たちは南部の第1日から暖かいホスピタリティに包まれた。

エモリー大学は昔のプランテーションの跡に建っており、起伏のある広い構内にすこし肌色の混った大理石の校舎が点在している。キャンパス周辺で人びとに行きあうと「ハイ」と声をかける。商店で買物をすると必ず「ありがとうまた来て下さい」というあいさつが加わった。

ロー・スクールのディーンは南部なまりでゆっくり喋る人であった。学生を自宅に招いた学年初めのパーティで会ったときから「そのうち夕食に来てほしい」といわれた。その後この言葉はディーンと会うたびにくり返されたが、日付が特定されることはなかった。東部に数年住んだときの経験では、パーティーではじめて会った人が互いに興味をもって「一度夕食に」といえば、ほとんど一、二週間内に連絡があって招かれる日時が決る。招かれ、招きかえす関係がたがいに関わりで終るか、興味があればその後も続くかはとにかく、人との出会いをさらに具体化するテンポは早い。ところでディーン

の日付のない招待の言葉を何度か聞くうちに、それが洗練された一種の「あいさつ」であることに気がついた。日本の「そのうちに一度お食事を」と同じである。ディーンは校務に忙しくなかなかゆっくり話せる時間がなくて申し訳ない、しかし、いつもあなたのことは気にかけているのですよ、という意味をこめたあいさつである。ついに一年の滞在中、招待は具体化しなかったが、その意味は十分かつ明確に、しかも暖かい気持をもって伝わった。

このディーンは、研究上で会いたいと思う連邦裁の裁判官や弁護士に、いつもゆきとどいた方法で紹介してくれた。そして行った先では、南部において、しかるべき人の紹介がいかに大切であり価値をもつかを体験した。ディーンにすすめられて、アトランタで開かれたABA（アメリカ法曹協会）大会に出て、ミシシッピ州ジャクソン市のS弁護士にあった。初対面のSさんは私たち一家をジャクソンに来るよう招いてくれた。これはパーティでのあいさつだけでなく、すぐ日程を定めた手紙がS夫人からきた。

私たち一家はお招きを受け、Sさんの広い家に数日間滞在した。S家は名家らしく、州の最高裁判事や弁護士をした祖先の写真が壁にかかっていた。私たちの部屋には滞在中の計画、夕食のメニューがS夫人の手書きでおいてあり、私たちのためのパーティの招待客のリストも添えられていた。その中には州最高裁判事や、当選はしなかったが前州知事候補者などがいた。パーティでこうした人たちが親しい友人としてくつろいでいるのをみると、それがいかにも少数の閉されたグループである印象が強かった(Silver, *Mississippi: The Closed Society*)。

アトランタの有力なG弁護士宅に招かれて「つぐみ」料理をご馳走になった。女主人が食卓で小さな銀の鈴を振ると、黒人のメイドが現われて皿をかえ、グラスに水を注いだ。話題が白人と黒人の公立学校における共学問題に及ぶと、女主人は「あの人たちは・・・」と声をひそめた。共学には賛成である、ただあの人たち

とは学力が違いすぎる、自分の子供はだから私立学校に通わせている・・・。

大学の宿舎は林のなかに広い中庭を囲んで建っていた。黒人のジャンター(janitor)がときどき落葉を掃いており、林のなかの小屋に一人で住んでいた。大学の正規の職員かどうかは定かでない。ある日、この黒人が戸口に来て応対にでた主婦に「この家の主人に会いたい」という。用件は5ドルの無心であった。近所の話では、郵便、新聞配達夫にはクリスマスの前後に数ドルの心付けを渡す習慣があるという。ジャンターもその対象になるようであった。

白人が個人的にかかわりのある黒人にみせる配慮は、自分たちに全面的に依存している者に対するやさしさであるようである。白人と黒人がたがいのしがらみのなかで作りあげた南部の社会のホスピタリティの根は、歴史をはるかに遡ったところにあるのかも知れない(Cash, *The Mind of the South*)。

二色の社会

1969年のジョージア州は、白人と黒人だけからなる社会であった。皮膚の色に関する限り二色であり、アメリカ社会の特色であるさまざまな人種はそこにいなかった。私たちが二人の子供をつれてアトランタの町を歩くと、視線が集まり、バスに乗ってもよく話しかけられた。白人でも黒人でもない異種への珍しさがあるようであった。

公民権運動の集会や、白人と黒人との対話集会に出て、東洋人がそこにいることを出席者の白人も黒人も意識するようであった。発言者は「皮膚の色が黒いからといって、白人と同等の機会をえられない理由はない」といったあと気付いてすこしあわてたように「それは黄色でも赤(インディアン)でも同じことだ」と付け加えることがよくあった。南部をヒッチハイク旅行中の日本青年が、立寄った酒場でいきなりヴェトナム戦場帰りの白人になぐられた。その青年が帰還兵にヴェトコンを思い出させたというのである。

アトランタの連邦公民権局で行政審判ケースを傍聴した。当時、黒人を白人校に入学させない方針を続ける学校に対して、連邦政府は補助金打切りの措置をとっていた。打切り対象となった学区教育委員会が共学計画を示し補助の継続を主張する。連邦裁定官（administrative judge）が打切りを決めた行政側の理由と教委の反論を聞いて決定を下す審理手続である。

当時、ニクソン大統領はこの打切り措置を緩めようとしていた。1968年の大統領選でニクソンは、南部白人票をとるため「南部戦略」を立て、公約として、人種共学への連邦政府の圧力を緩めることと、南部出身の裁判官を合衆国最高裁判事に指名することを掲げた。連邦教育補助の打切りはそれまでの人種共学への努力に水を注すものとして、政治問題となっていた。そんな状況のなかで、公民権局の主張はいま一つ迫力を欠いていた。

ここで私は日系二世のSさんに会った。Sさんは私をミシシッピ州の学区からやってきた校長かと思ったと、あとでいった。Sさんによると、ミシシッピ州の田舎の思いがけないような村に東洋人が住んでいるという。19世紀なかばの鉄道建設のさかんな時代に工夫として働いたあと住みついたのであろう。また第二次世界大戦まえから、南部にはひよこの雌雄を鑑別する chick sexer を業とする日本人がところどころに住んでいるという。

Sさんは連邦政府の“compliance officer”でその仕事は、連邦補助を受けている病院を査察して、白人と黒人が同じ病室に入っているかどうかを調べるのである。Sさんは各病室に並ぶベッドを示す図をもっており、各ベッドに赤と青鉛筆で印がつけられていた。白人と黒人のベッド・アサインメントを調べ、部屋や階によって隔離されていないことを確かめるのだという。私たちと同じアパートにセイロンからの医師夫妻がいた。ご主人は眼科医、奥さんは小児科医である。勤め先のE大の大学病院では輸血に白人と黒人の血液をきびしく区別しているといっていた。

Sさんが黒人の同僚と深南部のある州に査察に行ったとき、その州の上院議員から公民権局へ強い抗議がきた。マイノリティ・チームによる白人設備の査察は侮辱だというのである。Sさんは「一人の市民的権利が侵されることは万人の市民的権利が侵されることである」を信条としていた。

この二色の社会は、奇妙なところからみ合い、なれあい、相互依存的であった。その関係は隠微でなかなかはっきりといいあらわせないのであるが、南部に住んでいると何となくわかるのである。当時有名になった報告書（Kerner Commission Report, 1965）は、このままでは「アメリカは二つの社会、一つは白人、もう一つは黒人の社会に分れ、両者はますます隔絶され、不平等になる」と予言していた。それは多くの都市の状況、人種関係について、大筋では当然の、間違いのない指摘であるとしても、南部の白人と黒人の生活関係、感情にはそう截然と割り切れないものがあるようである。モリス（Willy Morris）が1969年、公立学校での白人と黒人の共学実施をまえに緊迫したミシシッピの故郷に帰省するときの心の動きを記した作品（Yazoo）がある。そこに年老いた祖母と、その祖母を生涯世話している黒人老女の交情が描かれている。

南部の地方では古くから白人と黒人が隣り合せて住んできた。こうした居住形態をさして“salt and pepper”という比喩が使われた。たがいが日常生活の細部にまで入り込んだ関係にある。一方で法の強制をともなった人種隔離の制度がありながら、白人は黒人に家事、育児の万端をたよっていた。黒人は白人の私事、秘事を知り尽している。白人は黒人にすべてを依存しながらその存在を無視した。隔離制度は黒人に白人との法的同等を認める建前をとりながら、両者の扱いに実質上の大きな格差を生んでいた（Harlan, *Separate and Unequal*）。その制度のもとでは、黒人は法的権利の行使を妨げられ、経済面でも白人への依存を強いられたのである。この両者の相互依存と憎愛相反がライト（Ri-

chard Wright) の *Black Boy* やエリソン (Ralph Ellison) の *Invisible Man* の主題が生れる土壤であろう。

隔離制度の跡

私たちは1963年夏、メンフィス(テネシー州) ジャクソン(ミシシッピ州)、シェリヴポート(ルイジアナ州)、ダラス(テキサス州)、を廻るバス旅行をした。ウォーレン (Robert Penn Warren) の *Who Speaks for the Negro* のなかに小話がある。ジャクソンに住む黒人が天国に召された。神様はこの黒人の生前の善行を愛でてもう一度生きかえらせ故郷の町に返すことにした。黒人は驚き悲しんで、天国に止まりたいと願ったが聞きいれられなかった。そこで彼は神様にどうかジャクソンへ一緒に来て下さいと頼んだ。神様がいうには「とんでもない。ジャクソンは御免こうむる。一緒に行ってもせいぜいメンフィスどまりだ」。

東部の友人たちの何人かは、私たちがなぜ南部へわざわざ行くのかと止めた。当時、南部では人種間の緊張がたかまり、白人と黒人の衝突事件がくりかえし報告されていた。1960年にグリーンズボロ(ノース・カロライナ州)で始まった座り込みは南部各地に広がっていた (Was-kow, *From Race Riot to Sit-in*)。1962年秋には、裁判所の判決によって、はじめての黒人メレディスがミシシッピ州立大学に入学することになった。バーネット知事は入学阻止を宣言し、暴動が起り、ケネディ大統領は連邦軍の出動を命じた。1963年夏には黒人の有権者登録を増やすために多くのボランティアがミシシッピ州各地に入った (Bel-frage, *Freedom Summer: Sutherland, Letters from Mississippi*)。ネシュバ郡では白人のボランティア3人が行方不明になり、のちに死体が発見された。

白人と黒人を隔離する制度は、南北戦争後の南部の再建時代が終了するとともに生れた。南部の各州はつぎつぎに公共の設備、場所において黒人を白人から隔離することを定めた州法を制定した (Woodward, *The Strange Career*

of Jim Crow)。1896年、合衆国最高裁がこうした人種隔離法の一つを合憲であると判決した。州内を走るすべての列車に、白人と黒人に同等の、しかし分離された座席もしくは車輻を提供しなければならないと定めたルイジアナ州法は合衆国憲法の第14修正の「法の平等な保護」に違反しないというのである。合憲のお墨付きをえて、人種隔離は法的な強制をとまなう制度として確立した。「分離するが、平等である」という分け隔ての扱いは、南都の生活のすみずみにまで浸透し、白人と黒人の社会生活を秩序づけ、日常の意識、行動を支配することになった。隔離は人が生れる病院の産室から始まり、死んで埋められる墓地にまで及んだ。(1970年1月、アラバマ州バーミングハムの共同墓地に初めて黒人が埋葬された。この兵士の埋葬は6ヶ月の訴訟ののち裁判所の判決によって可能になった)。交通機関、劇場、ホテル、レストランなど、人が集まる施設、場所では、分離の建前がきびしく守られた。現実には、多くの施設において、黒人は白人との共用が認められず、黒人用の同等の施設がない場合が多かった。黒人用の施設があっても、白人用に比べると劣悪であり、隔離制度は少数グループである黒人にとって、本質的に不平等であった。

この隔離制度は、合衆国最高裁が1954年に、公立学校における白人と黒人の別学制度を違憲とするまで続いた。しかし、実際に制度が崩れはじめたのは、1960年代になって黒人の坐り込み運動が各地で行われるようになってからである。

私たちは1963年6月、ジャクソンを訪れた。町を見物したあと公園でベンチに座っていると白人の管理人がやって来て公園外に出るようという。あとでこれが白人の遺言によって町に寄付された「白人のみ」の公園であることを知った。

ダウンタウンのバス乗場は segregation 時代の構造をそのまま残していた。中央の円形部分を中心に左右に待合室がある。それぞれの出入口の上には一応ペンキで上塗りされているが、

まだ **White Only** と **Colored** という表示が読めた。中に入ると一方の待合室にあるものは他方にも必らずあった。ベンチ、ランチ・カウンター、手洗、ロッカー、重量計が左右の部屋に備わっていた。中央部には円形の切符カウンターがあり白人の出札係が白人待合室に向って切符を売っていた。その右上にはバックミラーがとりつけられており、それをときどき見ながら背後の黒人の列が長くなったところで、今度は黒人側のカウンターに来て切符を売った。ミシシッピー州庁でも見学の黒人小学生は正面玄関ではなく、横の入口から出入りしていた。バスが停る田舎町の広場にも電話ボックスを一回り大きくしたようなアイスクリーム・スタンドがあり、正面と側面に小さな窓があって、白人は正面、黒人は側面に並んでアイスクリームを買っていた。

ジャクソンの表通りのランチ・カウンターに入ると、壁に「当店は客にサービス提供を拒否する権利を留保する」という張り紙があった。その前に座ると「私たちはどうだ」とききたくなる。

1962年には「フリーダム・ライダー」がバスを連ねて南部を巡り、行く先ざきでバス待合所の隔離された状況を打ち破った。ジャクソンでは、この運動に参加した乗客の多数が逮捕されアラバマではバスが焼き打ちにあった。

1963年のバス待合室は週末の客で混んでいた。白人と黒人はサインが塗りつぶされたあとも、やはり二つの待合室に分れていた。トレイルウェイ・バス（南部に本社がある）が着くと、各待合室から乗客が乗車口集まる。そこでバス運転手が、座席を指示して乗客を順番に乗せる。まず白人を前部の席から座らせ、黒人は後部から座らせる。私たちは丁度その境界に座らされた。長距離バスの運転手は運転の腕もプロであるが、車内秩序を保つため船長なみの権限もっている。座席の指示もその権限行使である。バスは満員になり、10人あまりの客をつみ残して発車した。黒人ばかりであった。

当時二つ以上の州にまたがって走るバスには

運転席のうえに「ICC（連邦州際通商委員会）の命により、人種を理由にバス利用客の差別扱いを禁止する」という掲示板がとりつけられていた。このバスにはそれが見当らなかった。たぶん白人の運転手がとりはずしてしまったのであろう。

ジャクソンでは、夜行バスに乗るまでの時間州庁を見学した。ホールの大大理石の柱に州出身の白人のミス・アメリカの大きな写真が掲げてあった。州政府の三権は行政府も議会も最高裁もこの庁舎のなかにある。知事も議員も判事も白人が占め、一つの建物のなかでたがいに親密なクラブ会員のように政治を動かしているのかも知れない。

市の案内書でみて **Jackson State College for Negro** を訪ねた。図書館の壁には何人かの黒人指導者の写真が並んでいるが、書架にはいかにも本が少なかった。州議会が予算を大幅に削ったので本が買えないということである。（その後、この大学の名称から「黒人」は消されたが、実質は黒人ばかりの大学として続いたようである。1970年6月、学生騒動鎮圧に出動した警官隊が学生寮に銃撃を加え、黒人学生2人が死亡した）。

キャンパスで出会った黒人少女が黒人の住むセクションの案内をしてくれた。まず自分の家で大きな西瓜をご馳走してくれたあと、母親が車で知人の小学校長、葬儀場の経営者、弁護士などを訪ねて会わせてくれた。葬儀業は収入の大きい事業らしく、自宅の車庫にキャデラックが二台入っていた。赤土の運動場では素足の子供たちが野球に興じていた。黒人のなかにも階層の分化がはじまっており、郊外に一戸建の住宅地がひらけはじめていた。

私たちを送ってくれた母親はバス待合所の2、3ブロック手前で車をとめ、私たちを降ろした。白人の集まる待合所に入るのを避けるようであった。市中の路上で白人と行き会った黒人が白人に道をゆずる光景を何度もみかけた。

1970年に再訪した南部では、もはやあからさ

まな隔離の例にぶつかることはなかった。1960年代の「公民権」運動によって、白人と黒人を隔てていた壁は各所で崩れたようである。スーパーの食肉を売るカウンターで、後から来た白人客の注文を先にとった白人の売子に、黒人客が大声で抗議していたのが印象的であった。

白人と黒人との共学

1969—70年にかけて南部人の関心を集めたのは、公立学校における白人・黒人の共学問題であった。1954年の合衆国最高裁の判決以来、15年が経っても共学は遅々として進まなかった。ここまで共学の実施が遅れたのは、南部の各州政府が1950年代後半から1960年代前半にかけて、全面的な抵抗をみせたからである(Bartley, *Massive Resistance*)。アメリカ人は州法と連邦法とに従わねばならない。南部人にとって州法と連邦法はしばしば矛盾した行為規範を示すことになる。連邦法が州法に優越するが、訴訟によってそのことが確認されるまでは、身近な州法に従わざるをえない。合衆国最高裁が別学違憲の判断を示しても、誰かが訴訟を起して、別学を維持している特定の学区に共学を求めないかぎり、最高裁判決は直接の効果をもたないのである。1969年秋、最高裁はすでに移行期間は終わったとして、「ただちに」完全な共学実施を命じる判決を下した。白人にとっても黒人にとっても子供の共学がにわかに身近な問題となった。

スタインベック (John Steinbeck) は、*Travels with Charley* のなかで、1960年代のはじめニューオーリンズの公立学校の共学実施の現場見聞を記している。秋の新学年はじめ、白人校に登校する黒人生徒を校門のまわりで白人群衆が待ちうけて、罵詈雑言をあびせる。それをみるためにさらに群衆が集まり、報道関係者が集まっている。それは毎朝の行事と化しており、群衆はひとしきり罵声をあびせると、それぞれ満足したように散らばってゆく (Bates, *The Long Shadow of Little Rock*, 1957. 最初の共学例となった黒人生徒の体験記)。

最高裁の即時共学実施判決を受けて、1970年

1月第5巡回区控訴裁判所はミシシッピ州をはじめ6州内の学区に対して、2週間以内に共学を実施するよう命じた。モリスの *Yazoo* のなかに、裁判官から「冷たく」判決を言い渡された学区教育委員会の反応が描かれている。もうこれ以上逃げられない、ついにくるべきものがきたというショックとあきらめの気持である。

アトランタでもおもに白人の高校生がデモ行進し、代表が訴訟を担当する連邦裁の裁判官に会って、共学の実施を次の学年はじめの9月まで延ばすよう要望した。すでに卒業のアルバムや行事も進行しており、この段階で共学のためにクラスを分けないで欲しいというのである。一方、共学にともなう白人教師と黒人教師の転校配置もクジを使ったりして決められた。担当裁判官の許には数多くの抗議や憎しみの手紙がきたという (Pelterson, *58 Lonely Men*; Bass, *Unlikely Heroes*)。

1970年3月、サウス・カロライナ州ラマーで、共学のため白人校へ黒人児童を乗せてきた通学バスを白人が斧の柄やバットをもって襲って、バス2台を横倒しにさせた。黒人児童数人がガラスの破片などで軽傷を負った。

しかし、南部の共学は全般的には平穩に実施された。フロリダ州知事が学区の教育委員を解任して、みずから共学実施反対に立ったが、連邦裁は命令違反一日につき10,000ドルの罰金を科すことを宣言し、知事は抵抗をやめた。アラバマ州でも裁判所の共学命令に反抗した9人の白人父母に一日100ドルの罰金が告げられ、まもなく子供は共学校へ通学するようになった。共学の意味と効果を疑問視する北部に比べて、南部においてはこの時期共学が進展した。それは、黒人にとって平等な教育が保障される、もっとも確実な早道であった。依然白人によって占められている教育委員会のもとでは、黒人が白人と同じ教室、同じ学校で学ぶのがとりあえず、もっとも手近な方法であった。白人にも黒人と同じ学区に住む以上、それはもはや拒否できない成り行きであった。長年の別学によって

生じた格差を埋めるには、まず共学という主張に単純明快な強さがあった。南部では黒人のなかで分離主義の主張が広く支持されることはなかった。

1970年、ジャクソンで見学した小学校では白人と黒人の一年生が同じ教室で机を並べて勉強していた。共学による新しい世代が育ちはじめたことは確かであった (Moody, *Coming of Age in Mississippi*)。いったん共学が実施されると、北部よりも南部の方がうまくいった。1976年 (建国200周年) にボストン市南区の公立高校の共学をめぐる不穏な事態がつづき、高校は裁判所の管理下に移され、通学バスには毎日、警官隊の護衛がついた。そのときサウス・カロライナ州の高校の生徒会が共学のノウハウを教えようとボストンへ出かけた。南部人は皮肉をこめてこの若者のミッションを送り出したことであろう。1969年に、南部に住む白人からも黒人からもこれからの人種関係は北部よりも南部の方がよくなるという観測をきかされた。われわれには人種関係について歴史的な苦悩と経験の積み重ねがあるということである。

その後、共学問題については、黒人原告と被告教育委員会が直接の話し合いによって共学の実施を決め、訴訟をとり下げる例が南部では目立っている。それが裁判による強制よりも望ましい方向であることはいふまでもない。

あたらしい南部

ジョージア州庁の売店でおみやげを買っているとき、後から声がした。「その絵葉書に写っている人を知っているか？ 私だよ」。ふりむくと州知事のマドックス (*Lester Maddox*) 氏であり、いきなり握手を求められた。彼は知事になるまえは、白人のみを顧客とするレストランを経営し、店に来た黒人に斧の柄をふりまわして入れなかったことで有名になった。マドックス知事は連邦上院小委員会で1970年2月、投票権法案について証言したあと、議事堂内で隔離主義者としてのシンボルである斧の柄を連邦議員に配って問題となった。南部の州にとき

おり誕生する変った個性の政治家であったが、ジョージア州では人種隔離主義を標榜する最後の知事となった (Sherrill, *Gothic Politics in the Deep South*)。1970年11月の選挙では、6年後に大統領になる、カーターが人種問題について穏健な進歩主義の立場をとって知事に当選した。南部の政治も確かに変りはじめていた (Watters, *Climbing Jacob's Ladder*)。

アトランタでもユダヤ系の市長について、黒人市長が誕生することになる。もはや白人有権者のみにアピールする政見では選挙を戦えなくなった。黒人の有権者登録が増え、組織されて、無視できない力になってきたといえよう。最高裁の一人一票原則が、地方レベルの選挙改革に影響しはじめたことも見落せない。1970年の人口調査は南北戦争以来はじめて南部に流入する人が流出する人数を上廻ったことを示した。

アトランタのラジオ番組に「リングラジオ」というのがある。放送局の番組担当者に、聴取者が電話で意見を述べる。名前も顔もださなくていい電話だけに、よく本音が出た。そして本音は紋切り型の表現をとることが多い。反共、反カトリック、隔離主義が結びついた白人の発言が多かった。「公民権運動は『コミイ (Commie)』の策動である」という類である。白人からの反論があると「お前は娘が黒人と結婚するのを許すか」という決まり文句がくりかえされた。かつてケネディ政権で国務長官をつとめたディーン・ラスク (Dean Rusk) をジョージア州立大学が教授に迎えたが、その任命にあたって同氏の娘が黒人と結婚したのを問題視する理事のいることが報道されていた。こうしたラジオでの問答は、新聞、テレビの論調の表面には現れないが、世論の底流にある、サブ・カルチャーともいえるものを窺わせた。黒人からの的確な発言、きびしい反論があり、人種、政治が話題のときには番組は活気を帯びていた。南部ではあらゆることが結局、人種を抜きにして語れないということになるようであった。

暗殺されたキング (Martin Luther King) 牧師ゆかりのエベニーズ教会の礼拝にも出かけた。

父君のキング牧師が司式をし、キング未亡人も出席する。その日の説教はニクソン政権の黒人に対する消極政策 *benign neglect* をきびしく批判し、有権者登録、教育、住居、雇用を進める実践活動に参加するよう会衆に説いた。黒人教会が歴史的にも「公民権」運動の拠点であることを実感させた。讃美歌“Someone Touched Me”の合唱が素晴らしいボリュームで会堂にひびいた。

「ジョージア松のように高い」と比喻に使われるほど、南部でみる松は真直に天を突くように高く育っている。日本の海岸の松を見なれた目には、同じ木とは思えない。

南部に咲く山茶花はやはりサザンカ (*sasanqua*) という。南部の春は早い。サザンカが散るとドッグウッドが開く。青味がかかったクリーム色と桃色の花水木は日本の桜と同じように、春にはなやかな色どりをそえる。そして南部の長い春にふさわしく、この花は満開のまま一ヶ月は咲きつづける。

1970年の春から夏にかけて、そこにはたしかに人種関係の因習が崩れ、新しい南部が生れる息吹きが感じられるようであった。

文 献 リ ス ト

○南部史および黒人史

- Wilbur Joseph Cash, *The Mind of the South* (New York: Knopf, 1941)
 John Hope Franklin, *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans*, 3rd ed. (New York: Vintage Trade Books, 1969)
 Bell Irvin Wiley, *Southern Negroes: 1861-1865* (New Haven: Yale University Press, 1965)
 Comer Vann Woodward, *The Burden of Southern History* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1960)

○年表

- Peter M. Bergman & Mort N. Bergman, *The Chronological History of the Negro in America* (New York: Harper & Row, 1969)

○人種隔離制度

- Louis R. Harlan, *Separate and Unequal: Public School Campaigns and Racism in the Southern Seaboard States, 1901-1915* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1958)

- Mary White Ovington, *The Walls Came Tumbling Down* (New York: Harcourt, Brace & Co., 1947)
 Allen Weinstein & Frank Otto Gatell, eds., *The Segregation Era, 1863-1954: A Modern Reader* (New York: Oxford University Press, 1970)
 Comer Vann Woodward, *The Strange Career of Jim Crow*, 2nd rev. ed. (New York: Oxford University Press, 1966) [清水博他訳『アメリカ黒人差別の歴史』(福村出版, 1977)]
 Vander Zanden, *Race Relations in Transition: The Segregation Crisis in the South* (New York: Random House, 1965)

○南部社会と人種問題

- Allison Davis & Burleigh B. Gardner, *Deep South: A Social Anthropological Study of Caste and Class*, 2nd ed. (Chicago: University of Chicago Press, 1965)
 John Dollard, *Caste and Class in a Southern Town* (New York: Doubleday, 1957)
 Hubert Humphrey, ed., *Integration vs Segregation* (New York: Crowell, 1964)
 Ralph Emerson McGill, *The South and the Southerner* (Boston: Little, Brown, 1963)
 Willie Morris, *North toward Home* (Boston: Houghton Mifflin, 1967); *Yazoo: Integration in a Deep-Southern Town* (New York: Harper's Magazine Press, 1971)
 Talcott Parsons & Kenneth B. Clark, eds., *The Negro American* (Boston: Houghton Mifflin, 1966)
 Charles E. Silberman, *Crisis in Black and White* (New York: Vintage Trade Books, 1964)
 James Wesley Silver, *Mississippi: The Closed Society* (New York: Harcourt, Brace & World, 1966)
 Robert Penn Warren, *Segregation: The Inner Conflict in the South* (New York: Random House, 1956); *Who Speaks for the Negro?* (New York: Random House, 1966)

○「公民権」(市民的権利)運動

- Sally Belfrage, *Freedom Summer: A Civil Rights Worker's Personal Account of the Historic Mississippi Summer Project of 1964* (New York: Viking Press, 1965)
 George Washington Cable, *The Negro Question: A Selection of Writings on Civil Rights in the South* (Garden City, N. Y.: Doubleday, 1958)
 Langston Hughes, *Fight for Freedom: The Story of the NAACP* (New York: Berkley Pub., 1962) [北村崇郎訳『自由のための戦列—NAACPの記録』(小川出版, 1970)]
 Louis L. Knowles & Kenneth Prewitt, eds., *Institutional Racism in America* (New York: Spectrum Books, 1970)
 Anthony Lewis, *Portrait of A Decade: The Second American Revolution* (New York: Bantam Books,

1965)

Elizabeth Sutherland, ed., *Letters from Mississippi* (New York: McGraw-Hill, 1965)

Arthur I. Waskow, *From Race Riot to Sit-in, 1919 and the 1960s: A Study in the Connections between Conflict and Violence* (Garden City, N. Y.: Doubleday, 1966)

Howard Zinn, *SNCC: The New Abolitionists* (Boston: Beacon Press, 1964)

○南部の政治

Numan V. Bartley, *The Rise of Massive Resistance: Race and Politics in the South during the 1950's* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1969)

Dewey W. Grantham, *The Democratic South* (Athens: University of Georgia Press, 1963)

Valdimer Orlando Key, Jr., *Southern Politics in State and Nation* (New York: Vintage Books, 1949)

Robert Sherrill, *Gothic Politics in the Deep South: Stars of the New Confederacy* (New York: Grossman Pub., 1968)

Frank E. Smith, *Look Away from Dixie* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1965)

Pat Watters, *The South and the Nation* (New York: Vintage Books, 1969)

P. Watters & R. Cleghorn, *Climbing Jacob's Ladder: The Arrival of Negroes in Southern Politics* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1967)

○教育、白人と黒人の共学

Daisy Bates, *The Long Shadow of Little Rock: A Memoir* (New York: McKay, 1962)

Robert L. Crain, *The Politics of School Desegregation: Comparative Case Studies of Community Structure & Policy-Making* (Chicago: Aldine Publishing Co., 1968)

Harold Howe, K. B. Clark, et al., eds. *Racism and American Education: A Dialogue and Agenda for Action* (New York: Harper & Row, 1970)

Florence H. Levinsohn & Benjamin D. Wright, eds. *School Desegregation: Shadow and Substance* (Chicago: University of Chicago Press, 1976)

Raymond W. Mack, ed., *Our Children's Burden: Studies of Desegregation in Nine American Communities* (New York: Random House, 1968)

F. Mosteller & D. P. Moynihan, *On Equality of Educational Opportunity: Papers Deriving from The Harvard University Faculty Seminar on the Coleman Report* (New York: Random House, 1972)

Gary Orfield, *The Reconstruction of Southern Education: The Schools and the 1964 Civil Rights Act* (New York: Wiley, 1969)

Charles E. Silberman, *Crisis in the Classroom:*

The Remaking of American Education (New York: Random House, 1970)

Robert Coles, *Children of Crisis: Study of Courage and Fear* (Boston: Little, Brown 1967); *Farewell to the South* (Boston: Little, Brown, 1972)

Anne Moody, *Coming of Age in Mississippi: An Autobiography* (New York: Dial Press, 1968)

S. M. Joseph, ed., *The Me Nobody Knows: Children's Voice from the Ghetto* (New York: Meridian Books, 1969)

Lillian Smith, *Killers of the Dream* (New York: Doubleday, 1963)

W. Stringfellow, *My People Is the Enemy: An Autobiographical Polemic* (New York: Harper & Row, 1964)

○法と裁判

Jack Bass, *Unlikely Heroes: The Dramatic Story of the Southern Judges who Translated the Supreme Court's Brown Decision into a Revolution for Equality* (New York: Simon & Shuster, 1982)

Derrick Bell, ed., *Shades of Brown: New Perspectives on School Desegregation* (New York: Teachers College Press, 1980)

D. M. Berman, *It Is So Ordered: The Supreme Court Rules on School Segregation* (New York: Norton, 1966)

Leon Friedman, ed., *Southern Justice* (New York: Pantheon Books, 1965)

Lino A. Graglia, *Disaster by Decree: The Supreme Court Decisions on Race and Schools* (Ithaca, N. Y.: Cornell University Press, 1976)

Richard Kluger, *Simple Justice: The History of Brown v. Board of Education and Black America's Struggle for Equality* (New York: Knopf, 1976)

Robert Lefcourt, *Law Against the People: Essays to Demystify Law Order and The Courts* (New York: Random House, 1971)

G. Theodore Mitau, *Decade of Decision: The Supreme Court and the Constitutional Revolution, 1954-1964* (New York: Scribner, 1967)

Louis B. Moreland, *White Racism and the Law* (Columbus, Ohio: Merrill, 1970)

Idus A. Newby, *Challenge to the Court: Social Scientists and the Defense of Segregation, 1954-1966* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1967)

Jack W. Peltason, *58 Lonely Men: Southern Federal Judges and School Desegregation* (New York: Harcourt, Brace & World, 1961)

○文学作品

Ralph Ellison, *Invisible Man* (New York: Random House, 1952)

Harper Lee, *To Kill a Mockingbird* (Philadelphia : Lippincott, 1960)

John Steinbeck, *Travels with Charley : In Search of America* (New York : Viking Press, 1962)

Richard Wright, *Black Boy : A Record of Childhood and Youth* (Cleveland : World Pub. Co., 1950); *Native Son* (New York : Harper & Brothers, 1940)

○邦文

本多勝一, 『アメリカ合州国』(朝日新聞社, 1971)

井出義光, 『南部——もう一つのアメリカ』 UP 選書 (東京大学出版会, 1978)

北村崇郎『見えないアメリカ』(研究社, 1973)

藤倉皓一郎「裁かれる南部——アメリカ最高裁の判決を追って(1~3)」『判例タイムズ』21-4, 5, 8 (1970) pp. 2-13, 2-17, 2-18

なお, この時期の南部を知るうえで, Southern Regional Council から定期的に発行された *New South* (季刊) および *South Today* (月刊), その他, 問題別に出される報告書が資料として貴重である。